



---

研究報告

---

# ラテンアメリカの中東文学

～『砂の三角州』を読む～

久野 量一

(東京外国語大学/ラテンアメリカ文学)

2022 年 1 月 8 日 (土)

中東現代文学研究会定例研究会 (第 25 回)

京都大学

---

共催：中東現代文学研究会

科研基盤研究 (A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性  
をめぐる人文学的、領域横断的研究」

## 久野 量一 | くの・りょういち |



1967 年生まれ。東京外国語大学教授。専門はラテンアメリカ文学で、メキシコ留学時代にはじめて行ったキューバ、「内戦」と呼ばれる時期に足を運んだコロンビア、この二つの国の文学に常に関心や愛着を持っている。

最近の関心はテストimoniオ(証言の文学)で、キューバでは革命後にこのジャンルが半ば公式化して多くの作品が生まれている。当事者の固有の語りと芸術家の普遍化の力がぶつかり合うテストimoniオの研究を深めたいと思案中。

そしてもう一つの関心を寄せているのは、朝鮮戦争におけるラテンアメリカ兵(コロンビアやプエルト・リコなど)の経験が文学作品にどのように取り込まれているのか。将来的には、日本を含め他の国々で朝鮮戦争がいかに語られているのか、言語を越えて比較したい。

著書として、『島の「重さ」をめぐって——キューバの文学を読む』(松籟社、2018 年)、翻訳書として、ファン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』(水声社、2016 年)、カルラ・スアレス『ハバナ零年』(共和国、2019 年)、エドゥアルド・ガレアーノ『日々の子どもたち あるいは 366 篇の世界史』(岩波書店、2019 年)、レオナルド・パドゥーラ『わが人生の小説』(水声社、2022 年)などがある。



ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。2022 年 1 月 8 日、プロジェクトの一環として、京都大学にて開催された中東現代文学研究会定例研究会で、久野量一さんに、ラテンアメリカの中東文学についてご発表いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

# ラテンアメリカの中東文学 ～『砂の三角州』を読む～

久野 量一

## 1. 『砂の三角州』とは

スペイン語圏のラテンアメリカ文学を研究している久野量一です。私は刊行間近の『中東文学選 2021』<sup>1</sup> にコロンビアのレバノン系作家のルイス・ファヤッドの「ベイルート最後の日」を翻訳しました。この短篇が収められているのは、アンソロジー『砂の三角州——アラブ短編、ユダヤ短編』<sup>2</sup> です。このアンソロジーは中東以外で書かれている——この場合ラテンアメリカですが——「中東文学」の一例としてとても貴重な本です。書影をご覧ください。

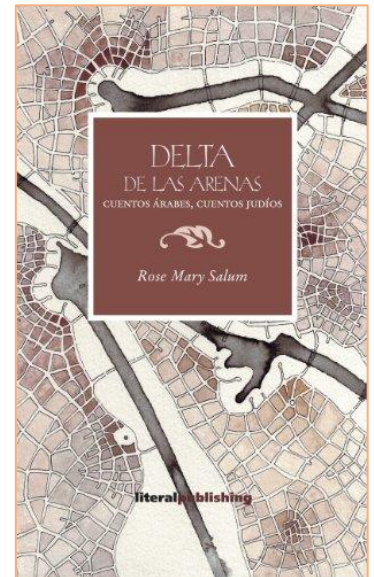
今回は、なぜファヤッドさんの短編を翻訳しようと思ったのか、その背景を自分の研究を振り返りながら話し、さらにこの本を紹介しながら、ラテンアメリカで書かれた中東文学作品の特徴を探ってみようと思います。

発表に先立って、エピグラフのように引いておきたい一節があります。日系ペルー作家のホセ・ワタナベさんがあるインタビューで言っていたことなのですが、「わたしは、すべての移住者は自分自身の過去を創作する権利があると思う」<sup>3</sup> というものです。この言葉を頭に置きながら発表を準備してきました。

さてこの『砂の三角州』には 34 作品が入っていて、ラテンアメリカのスペイン語圏とポルトガル語圏、つまりブラジルの作家が入っています。スペイン語作家はオリジナルのまま、ポルトガル語作家の場合にはスペイン語に翻訳されて掲載されています。2013 年に出版されました。

この本の編者は、ローズ・マリー・サルム(Rose Mary Salum)さんで、1964 年生まれのレバノン系メキシコ人女性です。彼女自身はかつて、アラブ短編のみを集めたアンソロジーを編んだことがあるのですが、それは私の手元にはなくて見るできませんでした。この本は彼女にとって 2 冊目の、そして今回はユダヤ短編も含めたアンソロジーになっています。

『砂の三角州』の版元であるリテラル・パブリッシング(Literal Publishing)は、彼女自身が立ち上げた出版社です。所在地はヒューストンで、彼女自身も現在ヒュースト



<sup>1</sup> 中東現代文学研究会編・岡真理責任編集『中東現代文学選 2021』2022 年 3 月。

<sup>2</sup> Salum, Rose Mary(compiladora), *Delta de las arenas*, Literal Publishing, Houston, 2013.

<sup>3</sup> ホセ・ワタナベはペルー生まれの日系ペルー詩人(1945-2007)。本文に引用した一節の出典は以下の通り。ホセ・ワタナベ『ホセ・ワタナベ詩集』(細野豊・星野由美共編訳)、土曜美術社出版販売、2016 年、p.188。



ンに住んでいらっしゃるようです。彼女は2004年から、このリテラル・パブリッシングから英語とスペイン語のバイリンガル雑誌 *Literal: Laten American Voices/Voces Latinoamericanas* (『リテラル：ラテンアメリカの声』) を Web 上で発行しています。おそらく印刷物としても出しているのではないかと思います、非常にエネルギーな活動を続けていることが分かります。

サルムさんは「序文」で、自分の生い立ちを回想しながら、以下のように述べています。

私の少女時代は、伝統や矛盾、そして多くの混乱のコラージュでした。家にはレバノンへの眼差し(と郷愁)があり、学校ではメキシコとその歴史を学んでいました。運命によって私が置かれたこの環境は、私の考え方を決定したばかりでなく、祖先が暮らした地方(país)、その近隣の国々(naciones)、[レバノンが] 独立以来直面してきた対立についてもっと知りたいという貪欲な好奇心を滋養もしました。いまになってようやく私は、私たちの両親が毎週日曜日に祖父母を訪ね、そこで叔父たちがレバノン内戦のようなとても遠い出来事や68年の[メキシコの] 学生弾圧と行方不明家族について、パレスチナ人の移動とユダヤ人の定住について、ルイス・エチェベリア[メキシコ大統領、在位1970-76]の6年間は生産的だったか否かについて熱心に議論していたわけがわかります。親戚の間で意見が一致しないことがあると、会話は家族に関する話題に戻ってきましたが、私やいとこたちは、熱を帯びた、でも私たちから見れば退屈な議論から逃げ出して、パティオに行きました。私の人生は当時、文化的にどっちつかずで、そのせいで、好奇心と和解の精神が自分の生き方を決定しました。私の関心は自分が生まれた国のみならず、論争を呼び起こし、炎の上がる中東にも向けられました。<sup>4</sup>

彼女の頭の中では、レバノンとメキシコがコラージュのようになっていて、最初はそれが彼女に混乱を引き起こしていたようですが、いずれその混乱を引き受けていくようになる。それは次のような文章にあらわれています。

私はメキシコ人でしたが、知らない家を懐かしみ、祖父母の出身地の安定を気にかけながら生きていました。<sup>5</sup>

知らない故郷を「懐かしむ」。彼女は自分では知らないレバノンの文化を祖父母らから受け継いでいくわけですが、テーマとしての《相続される郷愁》は、この本でかなり多くの作家に見られる特徴だと思います。それともう一つ、彼ら／彼女ら移住先で生まれた人たちが中東を訪問することを、それがはじめてであっても「帰還」と言います。帰還として捉える感覚もまた、親や祖父母から相続されているのです。

---

<sup>4</sup> *Delta de las arenas*, pp.14-15.

<sup>5</sup> 同上

アラビア語との関係を引いておきます。これも彼女だけが言っていることではなく、何人かの作家も似たようなことを言っています。

小さい頃、私はアラビア語とともに生きていましたが、いくつかの悪い単語や中途半端なフレーズだけを覚えました。大人たちは子供たちがわからないようにアラビア語を話していました。<sup>6</sup>

家の中ではレバノンや中東の話があり、外に行けばメキシコの歴史を学ぶ。家ではアラビア語を話す大人がいる。スペイン語を話す子どもである彼女は、壁に囲まれている感覚を覚えていたようです。

この発表を用意する上で彼女のインタビューなども読みました。そこからの情報も付け加えておきます。彼女はどんなアラブ系の作家を読んだかと聞かれたとき、小さい頃、親から与えられたものとして、米国のアラブ系の詩人ハリール・ジブラーン(1883-1931)<sup>7</sup>の本を挙げています。それから日本でも翻訳が出ていますけれども、フランスのレバノン系作家のアミン・マアルーフ(1949-)<sup>8</sup>は大人になってから読んだと言っています。

さて、次に、このアンソロジーの34篇はどのような順番で並べられているのかを見ておきましょう。今回の岡さん編の『中東現代文学選 2021』でも並べ方については悩まれたようですが、サルムさんもずいぶん悩んだようです。

最初はテーマごとに分ける、あるいは作家の出身地ごとに分けることも考えたようですが、そういうものは結果的に壁を作ってしまうようなのでやめています。この壁こそを取り払うことが彼女の思いとして強くあって、最終的には、作家の生誕年順に並べています。一番年長の作家はサルム・ミゲルさんで1924年生まれ。一番若いのは、Julían Fuksさんで1981年生まれです。

性別をみると、プロフィールで確認した限りでは、男性が18名、女性が16名です。若い作家も入っていることと、女性と男性がほぼ同数になることを目指しているよう

---

<sup>6</sup> Salum, Rose Mary, *Tres semillas de granada(Ensayos desde inframundo)*, Vaso Roto Ediciones, Madrid, 2000.

<sup>7</sup> オスマン帝国時代の1883年、現在のレバノン北部でキリスト教マロン派の家庭に生まれる。12歳でアメリカに移住。世界的に著名な詩集 *The Prophet* は、1923年に英語で出版され、30言語以上に翻訳された。日本語訳は、カリール・ジブラン『預言者』(佐久間彪訳)、至光社、1984年。

<sup>8</sup> ジャーナリスト、作家。レバノンに生まれる。内戦により1976年、パリに移住。1998年の *Samarcande* (アミン・マアルーフ『サマルカンド年代記—『ルバイヤート』秘本を求めて』(牟田口義郎訳)、ちくま学芸文庫、2001年)でフランス新聞協会文学賞、1993年の *Le Rocher de Tanios* でゴンクール賞を受賞。日本語訳が出版されている書籍として、『レオ・アフリカヌスの生涯—地中海世界の偉大な旅人』(服部伸六訳、リプロポート、1989年)、『光の庭』(戸田聡訳、連合出版、2011年)、『世界の混乱』(小野正嗣訳、ちくま学芸文庫、2019年)、『アイデンティティが人を殺す』(小野正嗣訳、ちくま学芸文庫、2019年)、『アラブが見た十字軍』(牟田口義郎・新川雅子訳、ちくま学芸文庫、2001年)。

にも思われます。このあたりが、後に述べるようなアンソロジーとしての価値を高めていると思います。

ユダヤ短編とアラブ短編を同じ本に入れることもまた、彼女にとって重要でした。彼女の主張を要約すると、おおよそ以下のようなことを言っています。

「アメリカ大陸にいる人たちはスペイン語かポルトガル語を母語にしているけれども、それぞれ独特の遺産、個人的な経験を受け継いでいる。ラテンアメリカという周縁で、多くのアラブ人とユダヤ人が平和に調和をもって生きている。中東で平和が失われたからといって、文学がそうなる理由はない。芸術表現は差異を調和させ、精算するための領域である」(序文より要約)

最初に言ったように、編者はかつてアラブ系作家だけを集めた短編集を作っています。その後、2006年のイスラエルによるレバノン侵攻や2008年のイスラエルのガザ侵攻を背景にして、ラテンアメリカにおけるユダヤとアラブの平和的共存を主題化しようとした。その結実が本書なのです。

実際、彼女の言っていることをそのまま言う人がある短編に出てきます。作品から引用します。レバノン出身でブラジル国籍のサリム・ミゲル(Salim Miguel, 1924-2016)の短編(「30あるいは、それ以上」)で、タクシーの運転手がユダヤ系の人で、お客さんがアラブ人なのですが、タクシーの運転手は客に向かってこんなことを言います。

「俺にはユダヤ人の血が流れている。あんたにはアラブ人の血が流れている。でも、俺たちは完璧に分かり合っている。友達同士と言ったっていいくらいだ。どうして中東のほうじゃ、あの馬鹿どもは同じことをできないのかね？」<sup>9</sup>

こういうアラブとユダヤをまとめたアンソロジーは、これまでラテンアメリカ文学を読んできた経験からするとかなり新しい切り口に見えます。ですので、ラテンアメリカ文学の研究をしている私がこういうまとまりをどのように捉えているのかについて話を進めていきたいと思います。

## 2. 「ラテンアメリカ文学」の中で

今回翻訳した「ベイルート最後の日」も、私はラテンアメリカ文学として読んでいます。もちろん作家がアラブ系の人で、作品の中にもアラブ系の人が出てくるわけですが、そのアラブ系作家を「移民文学」という枠組み、枠組みほどしっかりしたものではないにせよ、移民した人であると留保をつけながら読んでいるのかどうか考えてみると、どうもそうではありません。それがアラブ系作家のラテンアメリカにおける位置付けだと思います。

それでは、「ラテンアメリカ文学」とはどういうものなのかですが、基本的にはスペイン語、ポルトガル語などの言語で書かれている、つまり植民地で宗主国の言語を用いて書かれた文学になります。

---

<sup>9</sup> *Delta de las arenas*, p.32.

およそ 300 年の植民地時代のうちに、ヨーロッパ系の人たちはラテンアメリカを自分たちの土地にしてしまい、その彼ら、特に男たちが作ってきたのがラテンアメリカの文学です。言語が宗主国の言語であることと深く関わって欧米の流れを非常に強く受け、欧米の模倣と克服が試みられてきました。ですので、書き手の中心はスペイン系クリオーリョ（ヨーロッパ系白人）です。しかし、当然その中にはおさまらない移民、異なる出自の書き手もいます。

移民文学で一番目立つのは、ユダヤ系なのではないかと思います。実際にユダヤ系の作家の作品だけを集めた、アメリカ大陸あるいはラテンアメリカのアンソロジーが既に何冊か、いや、何冊もあります。国ごとに分かれている場合もあるし、大陸全体でまとめているものもあります。

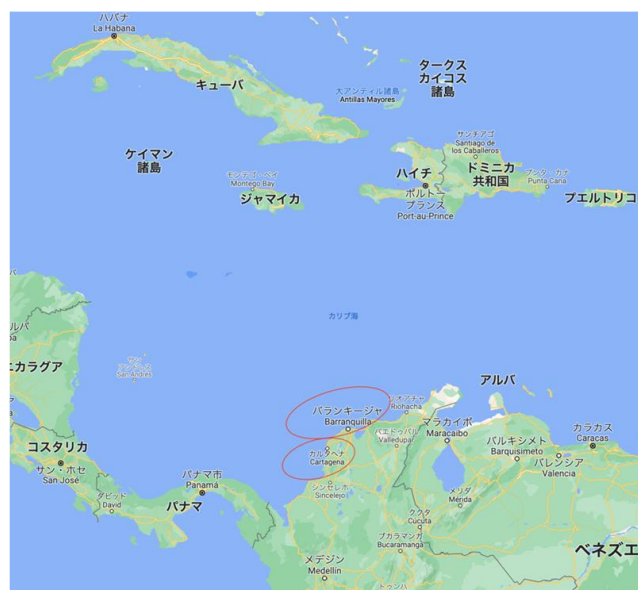
それから元黒人奴隷のアフロ系の作家も、数は少ないけれども、ないわけではありません。近年では、先住民の言語、例えばマヤ語などの言語を復活させ、それによって創作した作品もあります。場合によってはそこに日系作家、アジア系の作家も入ってくるといいますし、韓国系や中国系の作家の潜在力も非常に高いと思っています。まだはっきりとこういう作家がいるとまでは言えませんが、今後出てくるのではないのでしょうか。

最近ラテンアメリカの文学も多文化的になってきたのですが、これは実をいうとラテンアメリカ文学の中では結構大きな転換です。元々ラテンアメリカは国民として混血（メスティーソ）を創出して、単一のメスティーソ民族による、スペイン語ならスペイン語、ポルトガル語ならポルトガル語による文学ができたわけです。

ところが、1990 年代に複数文化の国として国家を再定義することがありました。私が中心にやってきたコロンビアは 1991 年、メキシコも 1992 年に、それぞれ複数文化の国として憲法を修正しています。その中で、スペイン語で書くアラブ系の作家を移民文学と読むか読まないかは、ラテンアメリカ文学の研究者それぞれがどのフィールドに近いかによって多少違うかもしれませんが、私はどちらかというと、移民

文学ではない角度から読む研究をしてきました。ちなみに、アラブ系とは、基本的にはレバノン、シリア、パレスチナの出身の人々のことを指しています。

ではなぜアラブ系作家を移民文学として読まずにきたのか。元々、私には専門が大きく二つあって、ここ何年かはキューバ文学を中心にやってきたのですが、一方でコロンビアのカリブ地方の文学も研究していました。コロンビアのカリブ地方は、ラテンアメリカの中でも多文化・多民族状況の縮図のような場所で、非常に狭い地域ですが、狭い地域だからこそ多民族状況を



(Google Map から)



非常に身近に感じることができます。スペイン系のクリオーリョの人たちもいますし、そこにヨーロッパ人の移民も流入しましたし、米国の文化も距離的な関係で近く、カリブの島々とのつながりも深いです。

そういう中で、例えばカリブのオランダ領に元々いたセファルディ系のユダヤ人がコロンビアのカリブ地方に入ってシナゴグを建てたり、文学作品を残したりしています。先住民族の集落もあり、黒人の逃亡奴隷の村もあり、アラブ系移民も非常に多い。ですので、私にとってのラテンアメリカには最初からアラブ系も非常に含まれていたわけです。

そのコロンビアのカリブ地方の地図をご覧くださいますが、(地図のなか、赤い丸で囲んだ) バランキーリャとカルタヘナ・デ・インディアスという都市やその近辺によく行きました。先ほど言った多文化的な状況は、このとても狭い地域に密集している。先住民族の集落や逃亡奴隷の村があり、そして白人やアラブ系の人々などが共存しているわけです。

2002 年、文学作品や資料を集めることを目的にカルタヘナ・デ・インディアスに滞在したのですが、人のつてがあるわけではなかったのも、とにかくどこか研究所を訪ねようと思ったのです。そうしたらカルタヘナには「カリブ研究所」がありました<sup>10</sup>。名前からしてぴったりだと思ってそこに行ったら、その副所長にホルヘ・ガルシア・ウスタ(Jorge García Usta, 1960-2005)さんという方がいたのです。



ホルヘ・ガルシア・ウスタ氏。2002 年 8 月 7 日、コロンビア、カルタヘナのカリブ研究所にて、筆者撮影

この方はいわゆる物書きで、詩も書くし、小説も書くし、批評もするし、ジャーナリストもやるような人で、まず話を伺いました。すると母方の祖父母がレバノン系移民で、30 代の時に詩集 *El reino errante: poemas de la migración y el mundo árabes* (『さまよえる王国——移住とアラブ世界の詩』、1991 年)を出していたのです。この方は、知り合って数年後に残念ながら急死してしまったので、付き合った期間はとても短いのですが、コロンビアで最初にもらった名刺が彼のもので、彼

の話も、レバノン系移民の家に生まれたことを誇らしく語ってくれるところから始まりました。

彼の作品を調べてみると、「マフムード・ダルウィーシュの熱帯 (Trópicos para

<sup>10</sup> 当時の正式名称は Observatorio del Caribe で、所長をつとめていたのはアルベルト・アベリョ (Alberto Abello Vives, 1957-2019)。コロンビアのカリブ地方の大学や研究所で主要ポストを歴任されたアベリョには本当にお世話になり、2019 年の早すぎる訃報には衝撃を受けた。『中東文学選 2021』に翻訳を掲載するためルイス・ファヤッドさんの連絡先をコロンビア・ハベリアナ大学のクリスト・フィゲロア氏 (Cristo Figueroa, Universidad de Javeriana) に教えていただいたが、フィゲロア氏と親しくする機会を作ってもらったのも、アベリョだった。アルベルト、本当にありがとう! (Gracias, Alberto, que descanse en paz)。



Mahmud Darwish)」や「シャティーラの壁で(En un muro de Shatila)」と題された詩が出てきました。

ウスタさんの詩を今回翻訳してみたのですが、その中には中東からコロンビアの方に移住していくことを連作詩にしたようなものがあったので、少しご紹介したいと思います。

「出立、ダマスカスからベイルートへの道で (1887)」

父の言うことを聞きなさい。  
マンスール、聞きなさい。この起源を分かち火を。  
ラウーフ、進むのだ、あの豊穡な海の向こうに

もうひとつの世界がある  
こぼれそうなほどの山  
祝祭の祭司に赤く染められた空  
これ以上の孤独が入らない大地。

(我々は明日  
誰にも何も言わずに  
出ていくのだ)

戦争はすでに、焼物師たちのこの繊細な血に  
重くのしかかっている。

ああ、レモンの信仰、  
信者の意図を  
無に帰す故郷の燠火よ。

ラウーフ、準備を整えよ。  
今の我々を運ぼう。  
一つのトランク、からだは四つ  
そして記憶を。

お父さんが家族に旅立とうと呼び掛けている内容の詩です。中東で戦争が起きてしまったので、「豊穡な海の向こう」の「もうひとつの世界」に行こうと最初の方で言っています。内容としてよく分からないところもあるのですが、戦争は焼物師たち（＝アラブの人びと）のこの繊細な血に重くのしかかっていて、中東の文化を捨てていかなければならない。だから、「ラウーフ、準備を整えよ。今の我々を運ぼう」「一つのト

ランク、からだは四つ、そして記憶を」運ぼうと結んでいます。

当時、中東から南米へのルートは、ベイルートからアレクサンドリアを経由してマルセイユ、ジェノバ、ナポリなどへ行って、そこから大西洋を越えて渡るものが多かったようです。ベイルートは非常にいろいろな人に言及される場所で、今回翻訳したコロンビア作家の作品も「ベイルート最後の日」ですし、多くの人の作品を見ても出てきます。

カルタヘナの後、私はコロンビアのもう一つのカリブの町、バランキーリャに行き、今度は詩人のメイラ・デルマールさん(Meira Delmar, 1922-2009)の講演会を聞きました。そのときに「この人はレバノン系の移民なのです」と紹介されて驚きました。両親が19世紀の終わりごろにレバノンから移住してきた方です。メイラ・デルマールは筆名で、本名はオルガ・イサベル・チャムス・エリヤー (Olga Isabel Chams Eliach) といいます。

彼女の詩に「杉」と題された作品がありますが、レバノン杉のことがうたわれています。これもやはりお父さんとお子さんの会話です。お父さんが娘に対し、「わが娘よ／レバノンの杉だよ。／何千年も前から／もっともっと前かもしれないが／神の足元で／育っている／このイメージを／心と血のなかに留めておきなさい／美しいものを間近で見たことを忘れてはいけないよ」と言っています。これが、お父さんから娘へと受け継がれる中東への郷愁なのだと思います。

次が、彼女の詩「移民たち」です。この詩では、皆さんにご意見を伺いたい箇所があります。

### 「移民たち」

杉、オリーブの大地  
採れたての葡萄の甘美な土地を  
海とともに、移民たちはアメリカの火をもとめて  
捨てた。

くちびるには  
乳香の味と  
目には  
水煙管の香りのついた煙を携えて。  
そのあいだに船は波間に消えていく  
ベリトス(Beritos)<sup>11</sup>の石を  
丘の麓の心地よい谷間を  
夏の豊穡な空の下に  
広げられたテーブルの

---

<sup>11</sup> 黒木英充氏から、Beritos はベイルートのことだにご教示いただいた。

ワインの祝宴を置き去りにして。

海は一度、二度、三度と  
名前を変え  
ついに熱い岸辺に到着する。

(中略)

川べりや山に家を建てた。  
かつて祖父が緑のオアシスに  
店を建てたように。

古い言葉は  
新しい言葉に変わり、  
物を名付けた。

砂漠の渇きを水の革袋で癒すように心を分かち合った。

ときどき思い出のリュートが響き、  
最初の星が  
午後の空に輝く頃  
水平線の彼方に  
消えていった“祖国”(bled)での一日を  
思い起こすのだ。

先ほどのガルシア・ウスタさんの詩と同じように、この詩も、移民たちが中東を捨ててアメリカに行く内容の叙事詩です。「杉、オリーブの大地」や「採れたての葡萄の甘美な土地」を捨ててアメリカに行くところから始まって、「くちびるには乳香の味」や「水煙管」などが中東の文化を指しているのだと思うのですが、船に乗ると海は何度か名前を変えて、ついに「熱い岸辺」、つまりカリブ海に到着する。言葉はアラビア語から新しいスペイン語になっていく。

新大陸に着いたとはいえ、「ときどき思い出のリュート」、アラブだと「ウッド」というのでしょうか、これが響いて、「最初の星が午後の空に輝く頃／水平線の彼方に消えていった“祖国”での一日を思い起こすのだ」と結ばれています。

ここでデルマールは「祖国」を表す単語として“bled”を使っています。原文には注が付されていて、“bled”にはアラビア語で「祖国」「国」「故郷」の意義があり、デルマールの両親が祖国のことを言うときにこの単語を使っていたと説明されています。研究プロジェクトの「ワタン」は出てこないのですが、“bled”の単語の意味合いがアラビア語でどういうものなのか、ぜひ伺いたい。

いずれにしても、このようにコロンビアのカリブ地方に行って文学の研究をしようとすると、ごく当たり前のようにアラブ系の作家に出会います<sup>12</sup>。ですので、ラテンア

---

<sup>12</sup> このほか、カルタヘナ出身のレバノン系移民3世の詩人にラウル・ゴメス・ハティン (Raúl Gomez Jattin, 1945-1997) がいる。彼は自分のアラブ文化との繋がりについて以下のように話



メロカ文学ではアラブ系の作家が特別な存在ではないということは、こういう経験から自分の中で作り上げたイメージなのかもしれません。コロンビアやブラジルもそうなのですが、アラブ系の移民は同化したと言われています。

### 3. 同化と抑圧

私が翻訳したルイス・ファヤッド(Luis Fayad, 1945-)さんはレバノン系のコロンビア作家です。彼は自分の一族について、以下のように述べています。

私の4人の祖父母は19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけてレバノンからやってきました。多くのレバノン人はヨーロッパとの商売の簡便さゆえに「コロンビアのカリブ・大西洋」沿岸部にとどまりました。内陸への移動は複雑で、そのうえ海外との個人的なやりとりは、内陸部から行なうよりも手取り早かったのです。当時、沿岸部の人々は子どもたちをヨーロッパに留学させるのを好みました。(中略)私の父方の祖父母は最初、「沿岸から内陸に流れる」マグダレナ河を利用してオンダに居を定め、後にボゴタに移りました。母方の祖父母も最初はオンダ、次いで、ファカタティバー、そしてボゴタです。(中略)概して大西洋沿岸部全域に多くのレバノン系の人びとが住んでいます。<sup>13</sup> (下線引用者)

アラブ系の移民の同化は、彼らがまず生地職人になって行商などをやり、その後製造業に移り、コロンビアの場合はさらに河川の蒸気船ビジネスに進出していく人が多かったようです。もう一つは政界への進出で、コロンビアの昔の大統領にフリオ・セサル・トゥルバイ (Julio César Turbay, 1916-2005) がいるのですが、この人は父親がレバノンのタンヌリン (Tannourine) の出身です。

それから、ルイス・ファヤッドのいとこのアル바로・ファヤッド (Álvaro Fayad, 1946-1986) は有名です。コロンビアの内戦期の反政府ゲリラ組織に「M-19」があったのですが、若者にすごく人気のあった組織で、彼はその創設メンバーの一人だったのです。組織内ではアラブ系の移民を指すあだ名である「トルコ人」と呼ばれながら活躍していました。

---

している。「僕はオマル・ハイヤムや『千一夜物語』の作者と同じ、アラブの詩人だ。ハティン一族はベイルートの同名の村からやってきた。祖父のミゲルは、11月14日にレバノンからカルタヘナ・デ・インディアスの港に着いた時、16歳だった。黒い美しい眼と高貴な顔立ち、背丈はほぼ2メートルあって、3人の兄と一緒にだった。金貨の入った巾着袋を持って、おぼつかないスペイン語を話していた。(中略)祖父のミゲルは寛大な、浪費家とも言える人で、数年後、シリアの Sahleh 出身のカタリナ・サファルと結婚した。彼女の子孫にありとあるよろこびを分け与えようとしてのことだ」(Fiorillo, Heriberto, *Arde Raúl*, Ediciones La Cueva, 2004, p.36)

<sup>13</sup> Clara Riveros, “Una dimensión transatlántica. La travesía no termina en el Caribe. ¿Los Árabes en Bogotá o los bogotanos de Fayad?”(<http://cplatam.net> [最終閲覧 2022年1月3日]), p.24.

このようにコロンビアのアラブ系の移民というと、同化あるいは、別の見方をすれば国家による包摂になるのでしょうかけれども、国家建設に関わった人びとであると語られることが多く、「移民文学」としては読まれにくく、だからこそ、このアンソロジーのように、アラブ系作家だけをくり出すのは非常に新しいアプローチ、これまでと違うアプローチだと思います。

では、どういう違いがあるのか。この本を作ったサルムさんとしては、同化だけでは済まない物語があること、みんなが同化したのではないことを示したかったのではないかと思います。そのことを、ファヤッドの「ベイルート最後の日」を、同じアンソロジーに入っているもう一人のコロンビア人の女性作家の作品と比較しながら見ていきたいと思います。

私が翻訳した「ベイルート最後の日」では、ナジーブというベイルートからの移民一世が妻と一緒に、物語上では65年前にコロンビアにやって来ました。ナジーブは妻と共に河川の蒸気船業を営み、後からやって来る親戚や同郷のアラブ系移民を助けているわけですが、彼らは物語の中ではレバノン系移民では固まらず、コロンビアに同化したアラブ系移民です。ナジーブは封建主義者にも家父長的な人も見えません。物語は控えめなおじいさんの最後の日々を描き出し、非常に味わい深い作品であると思うのです。

しかし、ファヤッドとほぼ同世代のレバノン系女性作家であるナイラ・チェハーデ(Nayla Chehade, 1953-)さんの作品「鏡の中のイルマ(Irma en el Espejo)」を読むと、少し違う角度からアラブ系一族が捉えられています。女性の視点から見たときのアラブ系一族はどうも違うのです。

どういうことかという、この作品から立ち上がるアラブ系の男たちは、実はコロンビア人男性に対してある種の差別意識を持っているのです。その差別とは、コロンビア人は黒人や先住民と混血している劣った人たちだとの見方から生まれるものです。したがって、アラブの高貴な一族に生まれた娘はそういう劣った男とは結婚してはいけないのだと、ある種の規範を娘たちに押し付けます。アラブの男はどんな混血女性と遊んでもいいのですが、娘たちの結婚相手はアラブ系の男性が理想で、そういう人と結婚しなさいと言うのです。

この物語の主人公の女性イルマにはコロンビア人の恋人がいて、プロポーズもされていて仲が良かったのですが、そうした規範があるために、家族に関係が露見すると無理矢理別れさせられてしまいます。それと対照的に、イルマの妹はアラブ系の男性と結婚して、たくさん子どもを産みます。アラブ系の理想を叶えた娘として一族の誇りであり、壮麗な結婚式を挙げ、祝福を受けます。

イルマはコロンビア人の恋人と別れさせられたので、家族を恨んだまま結婚せず、むしろ家族のいいなりには絶対にならないと抵抗していく。そしてそのまま一人で家に居座るのですが、その屋敷も朽ち果てつつあるところで物語は終わります。

これを見ると、アラブの一族の理想を背負わされ、それを叶えた妹と、叶えることに抵抗したイルマが対照的に描かれています。アラブ系の一族で女性たちは抑圧的に

育てられており、ファヤッドの物語にある同化していく男性たちの物語とは随分違うように思いました。

ですので、一つアラブ系への郷愁の相続といっても、それをものすごく抑圧的に受け止めてしまう側と、それとうまく渡り合いながらコロンビアに同化していくケースが見られます。そういう意味で、この作品集は男性だけでなく女性の作家をかなりたくさん取り上げているので、ここはやはり読みどころになっているのではないかと思います。

#### 4. 旅／帰還

このアンソロジーに見つけられる大きなテーマは、やはり「旅」や「帰還」という言葉で言い表せるものだと思います。主にユダヤ系作家の短編では、その旅は「記憶への旅」のようなものになり、思い出される記憶は、ホロコーストの記憶であったり、例えば絶滅収容所にいた人の記憶を孫や息子が聞いたり、あるいは戦乱になっているのでそこから脱出する話が入っています。

旅は、自己の探求、自分自身を探る旅という形をとります。移民も世代がどんどん入れ替わり、アイデンティティの葛藤のようなものに悩む若者が出てきます。例えば、「ボリビア人なのか、アラブ人なのか」をテーマを描いたのが、ロドリゴ・ハスブン(Rodrigo Hasbún, 1981-)の「社交クラブにて(En el club)」です。小説家になりたいアラブ系ボリビア青年が何を書こうか考えていると、年配の親戚に「俺たちの歴史を書け」と言われます。それはアラブ人の移民の歴史なのですがけれども、自分としては、では自分の国はどこなのだろうと悩んでしまう。

自分はここ[ボリビア]に帰属しているのか？あるいは別の場所、一度も行ったことがないけれども、それでも大切な場所、すぐ近くにある場所よりももっと重要な場所に帰属しているのか？それとも自分はあいだににいるのか？あいだににいるとはどういう意味だ？こちらにもあちらにもいないことなのか？こちらにもあちらにも同時にいることなのか？<sup>14</sup>

ハスブン作品の青年からは、完全な同化はできないのだ、との思いが感じられるのですが、さらに別の女性作家カティヤ・アダウイ(Katya Adaui, 1977-)は、父親がパレスチナ系のペルー人なのですが、本アンソロジーに掲載されている短編のタイトルは「半々(Mitad y mitad)」です。これはずばり、同化できない、自分のアイデンティティが半分半分でしかないことを示しています。

それから米国のバグダット占領も「記憶への旅」の一つのパターンなのですが、2003年のバグダッド占領を見て、13世紀にモンゴル人がバグダッドを略奪した歴史を語り始めてしまう作品もありました<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> Rodrigo Hasbún, “En el club”, *Delta de las arenas*, p.363.

<sup>15</sup> León Rodríguez Zahar, “Historia del mágico tablero de ajedrez y de la caída de Bagdad”,

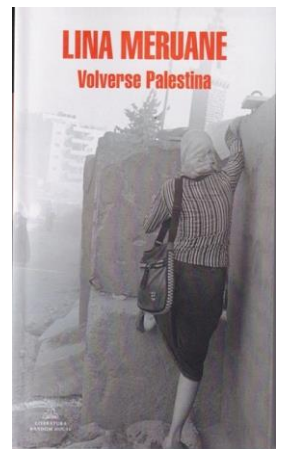
若い作家の「旅」で非常に特徴的なのは、3世や4世の「帰還」です。つまり、自分にとってははじめて訪れるので帰ることではなく、親や祖父母に代わって故郷に「帰る」わけです。しかしここで、帰ることが可能な人と不可能な人が出てきます。

一つは、ジャネット・L・クラリオン「取り戻されたドゥーマ」があり<sup>16</sup>、これはタイトルどおり、シリアのドゥーマに行って、そこを祖母に代わって「取り戻す」話です。作家の祖父母がその出身なのですが、物語の語り手はそこに行って祖父母が見ていた風景とメキシコの風景がいに二重写しになっているのかを確認します。

もう一方は、帰還が不可能な人です。それがパレスチナ系のリナ・メルアネのケースです。この人はパレスチナ系です。実は非アラブ世界でパレスチナ系移民が一番多いのはチリだと言われています<sup>17</sup>。

リナ・メルアネはこのアンソロジーにも短編が入っていますが、同じリテラル・パブリッシングからほぼ同時期に『*Volverse Palestina* (パレスチナ人になる)』を出しています。これはもう同化ではなく、半々でもなく、パレスチナ人になるわけですから、先祖返りというのか、新しい段階になっていると思います。

この人の文章にはドライブ感があって、読み始めると手放せないくらい面白いものでした。彼女は旅の多い人のようですが、旅をするとき、その旅には常に「戻る」「帰還する」意味がつきまわっていると考えています。では、戻る場所はどこなのか。それはパレスチナである。ではパレスチナへの帰還が自分にとって何なのか。それは「借りものの帰還である」と言います。



帰還する。この動詞は、パレスチナに行く可能性を考えるたびに私を襲う。私は自分に向かって言う。帰還ではない。私が一度も行ったことのない土地、自分ではなんのイメージも持っていない土地を訪れるだけのことではないか、と。(中略) 私の帰還ではない、借りものの帰還、他人の場所に戻ることに。私の祖父の場所、父の場所に戻ることにだ。<sup>18</sup>

このように彼女は、悩みながら旅と帰還を考え続けるわけです。彼女の父はエジプトのカイロに行き、カイロからパレスチナの方を見て、「俺は戻らない」と言ったことがあります。別のときにはヨルダンまで行って、パレスチナの方を見て、妻は「行きましょうよ」と言うのだけれども、「戻らない」と言います。彼女の祖父はパレスチナ行きの飛行機の切符も買っていたのだけれども、6日戦争が起きて戻れなかった。だからリナ・メルアネにとって戻ることは非常に重いテーマなのです。

---

*Delta de las arenas*, pp.249-262.

<sup>16</sup> Jeannette L. Clariond, “Duma rescatada”, *Delta de las arenas*, pp.139-142

<sup>17</sup> 例えば、映画監督ミゲル・リティン (Miguel Littin, 1942-) もパレスチナ系チリ人である。

<sup>18</sup> Lina Meruane, *Volverse Palestina*, Literatura Random House, 2021 [初版 2014], p.17.



そうした葛藤の果て、ついに彼女はイスラエルを訪れます。かつて祖父が住んでいたベイト・ジャーラーにはメルアネ家の親戚がいて、そこを訪ねます。ところが時間が足りず、実際に祖父がいた家には行けなくて、ガザにも行こうと試みたのですが断念して、ヘブロンに行きました。これが第一回の「帰還」です。

しかし翌年、再びパレスチナを訪れ、再びその訪問記を書いています。『パレスチナ人になる』の最終的なヴァージョンが出たのは去年(2021年)の秋でした。ですから、彼女の帰還の物語は2013年からずっと終わらずに続いていたわけです。このように、3世、4世の人たちは、父母や祖父母やさらにその上の世代の人たちに成り代わって帰還し、リナのように「パレスチナ人になる」ところまで行っているのが今の状況だと思っています。

別のところでも聞いたことがあるのですが、例えば今のシリアには、アルゼンチンに移民した人がまたシリアに戻り、シリアにアルゼンチンの風習を伝え、アルゼンチンのマテ茶やコーヒーの飲み方がシリアにあるのだと聞いたことがあります。ですので、場合によってはラテンアメリカからレバノンやシリアに戻った人たちによるコミュニティも生まれるかもしれません。そのような時代に来ているのではないのでしょうか。

## 5. 終わりに

最初にエピグラフとして引いたものをもう一度振り返って終わることにします。ホセ・ワタナベさんは、「わたしは、すべての移住者は自分自身の過去を創作する権利があると思う」と言っています。

ホセさんの父親は日本生まれでペルーに移住しましたが、その父は、過去を語るときにいろいろなバージョンを持っていたらしいのです。あちらではこんなことを言ったかと思えば、こちらではあんなことを言う。ホセさんは、父のそういう創作性、フィクション性のようなものに理解を示し、移住者には過去を創作する権利があるのだというわけです。

これは、移民の文学を読む上では大きなヒントになると思います。というのも、別の言い方をすれば、移民にとって過去はすなわち創作であり、創作はやはり文学作品の形を取るのではないのでしょうか。言い換えれば、詩や小説で書くしかない過去を持っているのが移民であるわけです。

このアンソロジーを読むと、本当に一人一人の物語があり、それがあふれてくるのが分かります。編者のサルムさんは、一人一人にオファーを出したらほとんどの作家がすぐに引き受けて、すぐに書いてくれたと言っています。彼らが文学を通じてしか語れない過去を持っていることは、まさにそういうところに表れているのではないかと思います。

補足資料として、関係のあるものを年譜のような形でも作っています。作品の要約的なものも書いていますし、他に詩も訳してみたり、リナ・メルアネさんの断片を訳したりしましたので、お時間のあるときに、こんな作品が入っているのだなと眺めてみていただければと思います。ご静聴ありがとうございました。

岡 ありがとうございます。たいへん興味深く拝聴しました。「ベイルート最後の夜」は本当に素晴らしかったので、こんな素晴らしい作品が収められている作品集だったら原語で読みたいと思って、スペイン語ができないにもかかわらず、思わず原書を購入し、スペイン語の文法書まで買ってしまいました（笑）。ほかの作品もぜひ読んでみたいです。特に私の場合、パレスチナは関係が深いので。私だけでなく、山本薫さんや田浪亜央江さんや佐藤愛さんなど、パレスチナの文学に関わっていらっしゃる方は、みなさん、同じお気持ちなのでは、と思います。

『中東現代文学選』の作品の掲載の順番に、毎回、私も頭を悩ませています。これまで、環地中海を12時から時計回りに、とか、ユーラシアを東から西へ、という順番にしたのですが、いつもマグレブや西サハラが最後になってしまいました。作家の生誕順というのはいいですね。ワタンとは何か、国やネーションといったものの自明性を問い直すことを掲げていながら、結局は国別という形でしか配置できていなかったもので、これからはもっとアナーキーに、著者の生誕順でもいいですし、そうすると、もしかしたら地域に限定されない、時代的な傾向なども見えてくるかもしれませんね。

久野 多分、それぐらいしかなかったのでしょう。でもそうすることで、3世、4世の移民たちが、時代の流れにともなって意識が変わってくることが見えてきます。もし国や地域別だったら、そこは見えなかったかもしれません。

岡 みなさん、いろいろ質問やご意見があると思うのですが、私から最初にテクニカルな部分でお聞きします。私が聞き逃してしまったのかもしれないのですが、バイリンガル雑誌「リテラル：ラテンアメリカの声」、この場合の「バイリンガル」とはどのような意味ですか。

久野 これはスペイン語と英語です。彼女はアメリカに行って、アメリカでスペイン語の場所がないということを強く感じ、とにかくスペイン語で発信できる媒体を持たなければいけないと考えました。ただ、やはり英語で書く人もいるので、両方可能にするためにスペイン語と英語のバイリンガル雑誌となっています。

岡 では、これは、位置づけ的にはアメリカの雑誌と考えていいのですか。

久野 そうです。アメリカで出しているラティーナの雑誌になります。

岡 なるほど。では、作者はアメリカにいるラティーナの作家たちということでしょうか。

久野 アメリカが多いです。でも、メキシコの人などもあるので、そのあたりは少しグローバルなのかもしれません。

岡 それから、1冊目のアラブ編、久野さんはまだお読みになっていないということでしたが、2冊目がアラブ・ユダヤ編ということで、ホロコーストの記憶を語るヨーロッパのユダヤ人移民も含まれている。アラブ人といったときに、その中にはムスリムもいるだろうし、クリスチャンもいるだろうし、別にアラブ世界から来たユダヤ教徒がいても不思議はないと思うのですが、アラブ編には、どういう人が含まれているのか知りたいと思いました。

久野 なるほど。アラブ編を入手してみたいですね。

岡 では、どうぞ、みなさん、ご自由に質問なさってください。いかがでしょうか。私は12月に、黒木英充さんにレバノン移民について講演していただいて、たっぷりお話を伺っていたのが、すごくいい予習になったと思いながら、久野さんのお話を伺っていました。

小寺 私はこのあたりの歴史が全く分からないのですが、スペインが南アメリカを占領して、植民地化して、いろいろ入植があったと思うのですが、アラブ人の入植は時代的にはいつになるのでしょうか。

久野 それでは、資料の最後の方に年譜を付けてあるので、それで少し見ておきましょうか。資料1の年譜をご覧ください。最初のセファルディ系のユダヤ教徒は1492年、コロンブスの新大陸発見と同じ年にユダヤ教徒は追放されていて、極めて象徴的な年です。その後、セファルディ系のユダヤ・コミュニティが19世紀初頭にコロンビアに入っています。アラブ系の移民は1880年以降、主にアルゼンチン、チリ、コロンビア、メキシコが行き先になります。私が知っているコロンビアは特に1880年ごろから1930年ごろにかけてたくさん入ってきた時代です。

小寺 そうですか。私はマグリブ文学をやっていて、アルジェリアの方なのですが、フランス人はアルジェリアに対してピエ・ノワール<sup>19</sup>を差別して、ピエ・ノワールはアラブ人を差別して、アラブ人は原住民のベルベル人を差別していたのですが、そういう点と比べてアラブ人とユダヤ人はどこから差別されているのでしょうか。

久野 アラブ人に対して差別する側となると、白人になりますよね。白人の側から見たらアラブ人は多分、差別の対象にはなり得たと思います。ただ、アルジェリアのよ

---

<sup>19</sup> 1830年から1962年までの間、仏領であったアルジェリアに定住していたヨーロッパ系入植者を指す俗称。ピエ・ノワールは「黒い足」を意味する。

うな形で語られているかということ、文学作品で読んでいる限りでは見えてこない感じはあります。

小寺 分かりました。ありがとうございました。

岡 黒木さん、コメントありましたら、お願いします。

黒木 久野さん、どうもありがとうございました。大変興味深く伺いました。今の小寺さんのお話に続けると、差別というのはレバノン・シリア移民の行った先によっていろいろでした。ラテンアメリカは比較的そういう差別が少なく、特にブラジルは少なかったと言われていますが、例えば合衆国やオーストラリアなど、いわゆる白人社会が自らのホワイテネスを主張した地域では、完全に非白人と見なされます。それに対してレバノン・シリア系は、自分たちは白人であると一生懸命主張しました。

いろいろ面白い話があって、レバノン系は南アフリカでも名誉白人となるのですが、一番大きい要素はキリスト教です。19世紀のレバノン移民は9割方がクリスチャンなので、自分たちはキリスト教の本場から来たのだと言うわけです。とりわけマロン派の人々は、教会を造りますので、自分たちはカトリックであり、しかも「イエス・キリストは白人なのか」と聞くと「白人だ」と答えて、「自分たちの方が近いのだ」と言うわけです。

ただ、19世紀末の人種的な白人の定義の仕方は、要するに定義したい人たちが、自分たちが含まれるように適当な地理的境界線を引いて行うことになる。そうすると結局、イスタンブールのボスフォラス海峡から西がヨーロッパだとずっと主張したがるのです。そして、レバノン・シリア系の移民、特にギリシャ正教徒やギリシャカトリックの人々は、自分はギリシャ人だとか、見たところもイタリア系の人と全然変わらないとか、いろいろなレトリックを使います。

それから、「パレスチナ人になる」というところも非常に興味深く伺いました。チリにパレスチナ系が多いというのはおっしゃるとおりで、19世紀末の移民はレバノン山地が圧倒的に多く、それから、シリア内陸部のホムスやハマー辺りの農村部のキリスト教徒、あとはダマスカスやアレッポの都市部から、これはインテリを中心にキリスト教徒がたくさん行きます。パレスチナもその頃、特にベイト・ジャーラーが一つ中心で、ベツレヘム、エルサレム、それからガリラヤ地方のギリシャカトリック、というところ限定されるのです。ベイト・ジャーラーは有名なのです。その人たちは、要するに遠くから見ればレバノン人、シリア人とほぼ同じ出なのです。外から見るとほぼ同じアラブ人で、ルートも同じようにアレクサンドリアを出て、あるいは直接マルセイユに行ったりして、そこから大西洋に出る形になります。

ですので、この場合の「パレスチナに帰る」というのは、世代的にもこの方の祖父となると第一次大戦前ぐらいになると思うので、いわゆるパレスチナ問題以前のパレスチナ人です。ただ、この頃はまだパレスチナ人と呼ばれていなかったでしょう。だ



から、どのくらいベイト・ジャーラーに親戚などが残っていたか分かりませんが、いわばそういうところから離れてしまって世代を経た人たちがもう一回、占領下のパレスチナ人に身を戻してみる、追放されたパレスチナ人たちとそういう形で共感している。だから、「パレスチナ人になる」というのは、重層的な意味があるのかなと思いました。これも大変興味深く伺いました。

それから「トルコ」のところですよ。これは私も最近いろいろ知ったのですが、あだ名でこのように呼ばれることが多いようです。レバノン移民も最初のうちはオスマン帝国の旅券を持っていくのです。19世紀末までオスマン帝国は、移民が出るのを一生懸命抑えようとしますが、それを突破してどんどん出ていってしまったので、解禁しました。

密出国だと正式なパスポートを持たずに出ることになるので、乗り換え地の例えばマルセイユで、オスマン帝国の領事館に行って、賄賂を払って旅券を得ていました。いずれにせよ、オスマン帝国から来たということで、行った先では「トルコ人」と呼ばれました。自分たちは「トルコではないのだ」と一生懸命言うのですが、要するにあだ名を付けられてしまうわけです。

去年か一昨年にアルジャジーラの英語番組で、アルゼンチンの軍政期に捕まって拷問を受けた若者が20年以上を経て、収監中のかつての拷問担当者に会いに行くというドキュメンタリー<sup>20</sup>の再放送をたまたま見ました。それは非常に強烈なものでしたが、その拷問した人間がやはり「トルコ」と呼ばれていました。

それから、ホセ・ガルシア・ウスタさんは、私とほとんど同じ年齢でいらしたと思うのですが、残念なことに早く亡くなくなられました。訳された「出立、ダマスカスからベイルートへの道」で、ダマスカスでの戦争がいわれているのですが、これは恐らく1860年のキリスト教徒地区の大虐殺事件のことだろうと思うのです。ただ、移民の語りとしては、1860年のダマスカスの事件は、レバノン山地の宗派紛争、実質的に内戦ですが、その余波という形でも起こっていて、それが移民の動機としていわれるのです。実際には、移民は1880年代から少しずつ始まって、1890年代にどっと増えていくのですが、時間差が20～30年ぐらいあるので、それが直接の移民の原因になるかということ、歴史的には議論があるところです。

ただ、このときに虐待されたので自分たちは出てきたのだ、と主張する人は多かったのです。レバノン・シリア移民が、あらゆる地域で行商をしたというのがこれまた一つの語りになっています。実際にそれが多かったのは確かなのですが、行商人が「私はこうやって苦労してきたのです」と言えば、話のタネになるし同情されて買ってもらえるわけです。

売り物のグッズに十字架があって、「これはパレスチナから来た十字架です」と言ってもオーストラリアでもアメリカ合衆国でも、あらゆるところでこれがよく売れたのです。その十字架自体も、実はベツレヘムで十字軍の頃からずっと土産物として作って

---

<sup>20</sup> ALJAZEERA “Rewind: Interrogating A Torturer”

<https://www.aljazeera.com/program/rewind/2017/2/15/rewind-interrogating-a-torturer>

きた歴史があります。だから、先ほど言ったパレスチナの移民たちも、もちろん本場の人間として十字架をずっと扱ってきました。その十字架にもいろいろなものがある、宝飾品などが付いたものはヨーロッパの博物館に入っているものもあります。そういうものを専門に作っている人たちは、ロシアやコロンビア、アメリカ合衆国など世界的な市場を持っていて、レバノン移民がそれを真似て、似たものをニューヨークなどで作っていたのです。

私はブラジルやアルゼンチンなどは研究仲間に連れていってもらって少し見ただけなのですが、韓国系、中国系の進出もたいへん強くて、かつてレバノン系の移民たちが押さえていた商業地域にどんどん進出しているところを見ると、おっしゃるように文学の新たなスポットが生まれているのかなと伺いました。いろいろ話し過ぎましたが、ありがとうございました。

久野 今の中で非常に面白かったのが、彼らがどういう経緯で移住してきたのかというときに、やはり何かストーリーが必要になってきます。そのストーリーに、向こうで迫害されたのだということが、ラテンアメリカに溶け込むときにものすごく重要な契機になって、それが同化していくときに強く作用したということがものすごくよく分かりました。先ほど言われたように、軍政時代に拷問した人がアラブ系の人であるというのも何か過剰適応的に、アルゼンチン人になり切ると言い方もおかしいですけれども、アルゼンチン政治を引き受けてしまっているということなのかなとも思いました。

それから、私もリナ・メルアネさんがパレスチナをどのように捉えるかということはお話を伺うまでは文字どおりにしか読めていなかったのですが、おじいさんが出たのは1910年ぐらいだと思います。だから、今のパレスチナ問題より前のパレスチナを出ているということを抜きにしてしまうと、あまり知らない人はすぐに飛びついてしまって、今のパレスチナ問題とリンクして読んでしまうということには気を付けないといけないと思いました。まだいろいろありますけれども、またお話を伺えればと思います。ありがとうございます。

岡 でも、リンクはしていますよね。リンクしていないわけではなくて、そのリンクの仕方が、重層的で複雑だということですね。今回の『中東現代文学選 2021』で佐藤さんが、アメリカのパレスチナ系の詩人たちの作品を紹介してくださっています。佐藤さんは、パレスチナ系アメリカ人の詩人、スヘイル・ハンマードについても論じておられます<sup>21</sup>。今日はオンラインで参加してくださっていますが、佐藤さん、久野さんのお話で感じたことがあったら、コメントをお願いします。

---

<sup>21</sup> 「『うちへ帰りたい』——スヘイル・ハンマードにおける『ワタン』と女のセクシュアリティ」『ワタン（祖国）とは何か——中東現代文学における Watan/Homeland 表象』pp. 194-210. [15H03136.pdf](https://www.kyoto-u.ac.jp/~kyodolibrary/pdf/docroot/15/H03136.pdf) (kyoto-u.ac.jp)

佐藤 私もパレスチナを出てアメリカ合衆国にやってきた人々がどのような経験をしてきたのかということに関心を持っており、通じるものを感じました。北米のケースとラテンアメリカのケース、どちらもとりわけ第1世代は非常に深い痛みを抱えているのだと思うのですが、その痛みの方向性というか、種類がまた違うという印象を受けました。私が研究対象として関心を持っている米国のパレスチナ系詩人たちは、親の世代がナクバで直接パレスチナを追い出された経験をしているケースが多く、また詩人自身が難民キャンプから貧困を逃れて出てきているケースもあります。そのため、これらの詩人たちの作品には、詩人が個人として抱えるトラウマを描いたものだけでなく、ナクバのトラウマ経験をそのまま引きずってアメリカに來ている親世代の姿を、子どもである詩人がじっと見ている、というようなものも多くあります。

ラテンアメリカに移ったパレスチナの人々については、懐かしい故郷を離れて來たこと自体がトラウマだと思うのですが、その故郷が自分のいないうちにイスラエルに占領され、かつての姿が消え失せてしまったというのは、直接ナクバを経験するなりその記憶を何らかの形で受け継ぐなりするのとはまた全然違う経験ですね。どちらがつらいかというのではもちろんなくて、歴史的背景の点で全然違うということですが。

岡 両親や祖父母に代わって帰還するというくだりを聞いていたときには、佐藤さんが書いたハンマード論にも同じようなものがありましたね。あれは修論でしたか。

佐藤 はい。私が修論で扱ったスヘイル・ハンマードが1996年に出したデビュー詩集 *Born Palestinian, Born Black* (パレスチナ人に生まれて、黒人に生まれて) の冒頭 “Dedication (献呈)” です。この詩で親世代に当たるのは若くして亡くなったおじです。実際、詩人のおじが10代か20代ぐらいのときに、ヨルダンの難民キャンプで解放闘争に関わる中で、パレスチナへの帰還を試みてイスラエル兵に殺されたということが作品の背景にあったようです。「献呈」には、そのおじのために私も「血によって、魂によって」、パレスチナ人としての闘いを受け継いでいつか帰るのだ、という思いが描かれています。それがデビュー詩集の「顔」ともいえる冒頭を飾っていることには非常に大きな意味があると思います。他にも、水煙草をのみながら父親から故郷の話聞く (“argela remembrance”)、母親が料理や家事をする姿に非言語的な形で語られる歴史を見出す (“post zionism (as it relates to me)”) など、親世代との関係性の中でパレスチナを考える興味深い詩をいくつも書いている詩人です。

岡 Americas の北と南で、そこにいるパレスチナ人なりアラブ人の経験がかなり違うということですね。例えば、アラブ系コロンビア人がコロンビア人を蔑視するというのも、やはり北米だとアラブ系がアメリカ人社会の中でアラブとして差別される、ムスリムとして差別されるという印象があります。多くは移民社会の中でマイノリティとして差別されるという経験だと思うのだけれども、その逆があるということですね。どこの地域からいつの時代に移ったか、そして北と南でそれが違う。だから、いかに

今まで北米中心の視点からしか見えていなかったのかということが分かりました。

それからパレスチナ文学も、ナクバから考えても 70 年以上たっているわけです。そうすると、パレスチナ人のディアスポラがものすごくグローバルになってしまっていて、以前はアラビア語でアラブ諸国でいろいろ書かれていたものが、今は佐藤さんが研究しておられるように英語でも書かれているし、デンマークに詩人がいたりするし、単に注目されていないだけで、例えばスカンジナビアにもいるかもしれない。だから、パレスチナ人のディアスポラの文学は、全貌が全く分からないのだけれども、今回のご発表で、ナクバ以前から始まるディアスポラがあり、「パレスチナ文学」の地平もさらに広がりました。『パレスチナ訪問記』、ぜひ訳してください。

久野 実を言うと、私はリナ・メルアネさんと会ったことがあり、それ以来やりとりがあります。質問があつて送ると、すぐ返事をくれる人なのですが、この人の作品をそんなにきちんと読んだことがなかったので、すごく失礼だったなと思っています。でも、今回読んでこれはすごい作品だと思いました。この『パレスチナ人になる』は先程言ったようにドライブ感のある文体で、読み応えがあります。でも、これはパレスチナのことを分らないと訳せないのです。

岡 大丈夫ですよ。中東現代文学研究会のパレスチナ組が、全員でサポートします。

久野 本当に教えていただきながらやりたいと思います。

岡 次の『文学選』がいつ出るかは分からないので、それよりも先に、ぜひ本の形で出版していただきたいですね。

山本 岡さんがおっしゃったことで、北米と南米が違うというのは少し語弊があると思います。先ほど黒木さんがおっしゃったとおりなので、私が付け足すことではないのですが、例えば南アフリカでもレバノン系は名誉白人という扱いを受けたという話がありましたけれども、アメリカ合衆国でも移民が入ったときに白人であることを主張するというか、そういうお墨付きをもらうことで溶け込むということもありましたし、例えば南アフリカなどではレバノン系の人が……。

黒木 いや、アメリカ合衆国では、裁判で何とか勝ち取ろうとするのです。

山本 だから、別に南米だけということではなくて。

岡 別にそれを踏まえていなかったわけではなくて、やはり 9.11 の後であるとか、アラブ系であるということ、ムスリムであるということがかなりメインとなっている。



山本 結局、それが中心だと思ってしまうとそうなのですけども、最初はキリスト教徒が多くて、その後また入ってきたイスラーム教徒の難民はもう少し時代が遅れるのですよね。そうするとまたちょっと違う。

岡 いつの時代に移民するかということですね。

山本 やはり 19 世紀にさかのぼって、例えばキリスト教徒が中心のレバノン・シリア地方からの移民の経験を本などを読んで調べると、そういう先入観と全然違う経験があるのだということ。

岡 けれども、クリスチャンであるということは大きいですね。

山本 とても大きいですし、それを資源として利用するというのが。

久野 そうですね、まさに資源ですね。

山本 聖地の聖水だ、十字架だと言って売って、同じ白人だと見なされなくても、それもまた何か利用して、聖地からやって来たエキゾチックな人間として自己アピールをする。ここにも少し書かれていたハリール・ジブラーンは、黒木さんにとっていた科研でも私は少し調べ直して書いたりしたのですが、彼などもまさにアメリカで成功していて、大きな理由とってしまったら失礼かもしれませんが、作品ももちろん素晴らしいけれども割と自己演出力のようなものがすごかった人で、その中には聖地からやって来た魅力的な賢人ということで、それで女性ものすごく魅了して恋人に事欠かないなど、当時のサロンに呼ばれて時代の寵児になるのはやはりそういう背景を資本として最大限に利用したからなのです。そういうイスラーム教徒でアメリカで差別されるというイメージと全く違う経験があるという点で、すごく面白い題材ですね。

あと、誰もおっしゃらないのですが、先ほど久野さんが引かれていた翻訳のところで、「祖国」を意味するという。

久野 “bled” ですね。

山本 恐らくアラビア語の「ビラード」ですね。

久野 この単語自体は間違いですか。

山本 いや、発音が正確でないというか、少し口語っぽくなまっていると思うんですけど、「バラド」か「ビラード」が皆さんのイメージではないでしょうか。

久野 なるほど。それを彼女はアルファベット化してこう書いたということですか。

山本 私は「ビラード」ではないかと思いますが、「バラド」だとレになるかなという。

岡崎 多分、「ワタン」ではなくて「バラド」だと、「あなたの田舎はどこ？」みたいなニュアンスだと思います。ここに並べていただいた最後の「故郷」みたいな意味が強まるのです。「ホームランド」よりも「カントリー」といったニュアンスでしょうか。

19世紀末に移民したときには、パレスチナは統一された「ワタン」という認識がまだなかったとされています。まだオスマン帝国の一地域でしたから。そうすると、両親は「あそこから来た」と言うときに、「ワタンから」とは多分言わないと思うのです。

山本 そういう物理的な国や地域を指すときには「ワタン」はあまり使わないのではないかと思います。単数的だと「バラド」、複数形だと「ビラード」で、どちらでも「カントリー」の意味にはなるので、どちらかということなのですが、私は多分、母音が「e」になっているということは、「バラド」ではなくて、「ビラード」がなまって「ブレード」みたいになったのではないかと思います。

黒木 レバノン方言ですね。

山本 最初の母音がなくなるという。

岡 単数の「バラド」だったら、アクセントが前にあるから母音は脱落しない。

山本 そうなのです。このeには抑揚が出ない。

黒木 でも、他の言葉に変わるとそういうことはよく起こりますよ。「バラド」という言葉にはすごくいろいろな意味があって、「まち」ということもあるのです。「まち」だったり「国」だったり、ものすごく伸縮性がある言葉で、日常的であり、なおかつ非常に近い言葉なのです。「ワタン」というとやはり少し構えてしまうところがあると思います。

久野 ナショナルなものを前提とすると「ワタン」になる。

黒木 エジプトの国歌が「ビラーディー」で始まり、レバノンの国歌は「ワタン」なのです。「クッルナー・リ・ル＝ワタン（私たちはみんな祖国のために）」というのがあって、その辺も国によって言葉が違います。

山本 エジプトで「バラディ」といったら、それは「村」だったり「地方」、国の中の

一部、「生まれた村」になるので、エジプト全体の国を指すのはやはり「ビラーディー」です。その辺のニュアンスが。

岡 アラビストとしては「バラド」なのか「ビラード」なのかははっきりさせたいですね。音韻論的には「ビラード」の長音のアクセントが残って、bled になっているという気がします。「故郷」の意味だったら、「バラド」だけど。

山本 「バラド」は狭過ぎると思う。国家の意味で使っているなら。

岡 そこが分からないですよ。祖国の意味で使っているのだとしたら「ビラード」。

山本 どちらでも使える。

岡 でも、彼女はネイティブではないでしょう。だから、父親が使っていた言葉を、父親が意味していたのと同じように理解した上で使っているのかという世代間ギャップとかもあるかも……。

久野 なるほど、そんな難しいことなのですね。

岡 この話題だけで一晩、議論できそうですね（笑）。先ほど黒木さんが1860年のダマスカスの虐殺に言及されましたが、このワタン研究プロジェクトの一環として、岡崎さんがイニシアチブを取ってウサーマ・マクディシーの『共存の時代』という本の読書会を行っています。ついこの間、読書会の第3回があったのですが、まさにこの時代の話がテーマになっていて、そこでマクディシーが「ワタン」を「ホームランド」ではなくて「ネーション」と訳しているということが問題になりました。今、「バラド」か「ビラード」かという議論をしていて、「ワタン」が「ホームランド」か「ネーション」か、という先日の議論を思い出しました。

田浪 先ほどリナ・メルアネの祖父母の出身地であるベイト・ジャーラーのことが取り上げられて、黒木さんがいろいろ説明してくださったのですごく分かりやすかったのですが、ベイト・ジャーラーは私が調べているタウフィーク・カナアーンという、委任統治期のパレスチナ民俗学者の出身地でもあります。ちょうどその時期、1910年ごろにベイト・ジャーラーからすごく多くの人たちがチリに移民したというのが、現在のベイト・ジャーラーの町史のようなものに記録されていたり、チリに移住した人の中でおもだった人の名前がそこに書かれていたりして、ディアスポラはディアスポラかもしれないですけど、むしろ町の一つの豊かな記憶として集団的に記憶されているという印象をもっています。

それで、南米だけではなくてナクバ以前のパレスチナ人の国外移住は、もちろん政

治的な事情や、クリスチャンに関してはオスマン期に迫害されたり、徴兵制から逃れるためということもあったとは思いますが、やはり経済的にチャンスを得ようとするような野心を持って、成功するために出た人も結構いて、うまくいかないとまたパレスチナに戻ってきたりする人もいたようです。ナクバとの連想で、ナクバ以前にもパレスチナ人のそういう離散があったのだと捉えてしまいそうなのですが、出ていく理由は結構いろいろですし、当時の雑誌を見ていると面白いのが、「今どきの若者はかなり安易にアメリカに行ってしまうています。アメリカに移住した後の経済的な見通しをきちんと持たずに無計画に行ってしまうて、それだと後で苦勞するから、もう少し計画を持ってアメリカに行きなさい」という説教というかアドバイスのようなことが書かれたりしているのです。1907 年ごろにニューヨークで出されていたアラビア語の文芸誌などを見たりしているのですが、いろいろな人たちがいたのだなということを思います。

久野 少しお尋ねしたいのですが、ベイト・ジャーラーに「チリ人広場」という地名ができてることがリナさんの本の中に出ていたような気がするのですが、そういうことではなかったですか。

田浪 そういう名前の広場の記憶はないのですが、調べればすぐ分かると思います<sup>22</sup>。ベイト・ジャーラーはすごく面白い場所ですね。ベツレヘムの隣の町で、ベツレヘムに比べるとちょっと影が薄いですが。住民は基本的にみんなクリスチャンです。

久野 分かりました。いろいろ助けを請うかもしれませんので、よろしくお願いします。

岡 研究会が全力を挙げて、久野さんの翻訳をサポートしますので、ぜひ訳してください。

久野 ありがとうございます。

岡 では、そろそろ時間ですので、久野さんの発表はここで終わりにしたいと思います。久野さん、どうもありがとうございました。

久野 ありがとうございました。

[了]

---

<sup>22</sup> 2010 年、チリ独立 200 年を記念し、ベイト・ジャーラーの主要道に面する町はずれの広場に石碑が設置された。「チリ広場」の命名はこの時かと思われる。翌 2011 年、チリのセバスチャン・ベネラ大統領がパレスチナを初訪問し、この広場に立ち寄っている。



## 資料 1. 年 譜

- 1492 年 ユダヤ教徒追放令。ユダヤ人（ルイス・デ・トーレス）、コロンブスの通訳（ヘブライ語、アラビア語）としてキューバ上陸。  
以降、多くのセファルディ系ユダヤ人、新大陸へ。
- 19 世紀初頭 コロンビア・バランキーリャに、キュラソー（オランダ領カリブの島）出身のセファルディ系ユダヤ・コミュニティ誕生。
- 1874 年 最初のアラブ移民、ブラジルへ。ブラジルとオスマン帝国の協定により多くの移民がブラジルへ。
- 1880 年 クレオパトラのオベリスク [クレオパトラの針]、アレクサンドリアから NY に移送。
- 1880 以降 アラブ系移民 アルゼンチン、チリ、コロンビア、メキシコへ。
- 1880-1930 コロンビアにアラブ系移民多数。ファヤッドの祖父母もこの時期に。
- 1924 年 米国の「排日移民法」によりアラブ人制限。中南米へ。
- 1928 年 アシュケナージ系ユダヤ人、バランキーリャへ。ユダヤ系作家の作品あり。
- 1945 年 ルイス・ファヤッド、ボゴタで生まれる。
- 1948 年以降 パレスチナ人、チリへ。アラブ世界以外で最大のパレスチナ・コミュニティ
- 2003 年 米国がバグダッド占領
- 2006 年 7 月 イスラエル、レバノン侵攻
- 21 世紀～ アラブ系、ユダヤ系作家の米国移住

※Ignacio Klich and Jeffrey Lesser(ed.), *Arabs and Jewish Immigrants in Latin America: Images and Realities*, Frank Cass, 1998 など参考久野が作成。

## 資料 2. 『砂の三角州』所収で日本語訳のある作家の作品

- ・アリエル・ドルフマン『南に向かい、北を求めて』（飯島みどり訳）岩波書店
- ・ミウトン・ハトゥン（ミルトン・ハトゥン）『エルドラードの孤児』（武田千香訳）水声社
- 「大自然の中の東洋人」（鈴木茂訳）、『囚われて』名古屋外国語大学出版会
- ・エドゥアルド・ハルフォン『ポーランドのボクサー』（松本健二訳）白水社

研究報告  
ラテンアメリカの中東文学 ～『砂の三角州』を読む～  
久野 量一

---

作成：ワタン研究プロジェクト  
編集：岡 真理  
編集補助：西道 奎（京都大学大学院人間・環境学研究科研究生）  
表紙デザイン・レイアウト：岡 真理  
発行：2022 年 7 月 27 日  
連絡先：プロジェクト・ワタン事務局  
projectwatan3@gmail.com  
<http://www.projectwatan.jp/>

---

© Ryoichi KUNO 2022